

氏 名 石川 巧

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大乙第 256 号

学位授与の日付 平成 30 年 9 月 28 日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 戦中・戦後の稀覯雑誌と出版文化に関する研究

論文審査委員 主 査 教授 劉 建輝
教授 細川 周平
教授 坪井 秀人
教授 成田 龍一
日本女子大学 人間社会学部
教授 紅野 謙介
日本大学 文理学部 教授

(様式3)

博士論文の要旨

氏名 石川 巧

論文題目 戦中・戦後の稀観雑誌と出版文化に関する研究

本論はアジア太平洋戦争の末期から戦後占領期にかけて発行された総合文芸雑誌、および、同時代の印刷と雑誌出版に関する研究をまとめたものである。本論がとりあげた雑誌は、いずれも国会図書館をはじめとする日本国内の図書館、資料保存機関に揃っておらず、これまでの研究においてほとんど言及されることがなかったもの、すなわち、戦後の出版文化史に痕跡を残していないものばかりである。論文タイトルの「稀観雑誌」という表現はそこに由来している。いままで世に知られていない雑誌の紹介と分析を兼ねているため、本論では原則として総目次を作成して各節の末尾に補助資料として添付した。また、各節の内容はすでに単著や共著、復刻版の解題などで活字化されている。

序論では戦前における内務省の検閲と言論統制の仕組み、戦後占領期におけるGHQの検閲、「紙飢饉」とセンカ紙ブーム、出版界の復興について概説し、同時代における出版界の状況を概観した。特にセンカ紙ブームについては多くの分量を費やし、戦後の出版文化における裏面史を明らかにした。

第1章は戦中・戦後に全国の新聞社が発行した総合雑誌のなかでも、特に著名作家が数多く寄稿するなどして出版文化に重要な役割を果たしたと考えられる雑誌として『月刊読売』、『月刊毎日』、『月刊さきがけ』、『四国春秋』を論じた。『月刊読売』は戦時下から戦後占領期にかけて継続発行された唯一の新聞社系総合雑誌であり、マスメディアが敗戦をどのように跨いだのか？ 戦前のイデオロギーを脱ぎ棄ててGHQの占領政策に阿るためにどのような言論操作を行ったのかを考察した。『月刊毎日』は1944年秋から1945年8月まで外地の北京で発行された日本語雑誌であり、その発見自体が大きな意義をもっているが、本論では雑誌刊行直前まで毎日新聞社の主筆だった阿部眞之助がフィクサーとしての役割を果たしていたという立場から論を展開し、大佛次郎、石川達三、壺井栄、佐多稲子、尾崎士郎などの新発見小説を分析した。さらに、同誌に寄稿した中国人作家、中国文学者たちの取り組みにも注目し、この雑誌が日本と中国のありうべき関係性を模索していたことを明らかにした。

『月刊さきがけ』の場合は、当時秋田に疎開していた作家伊藤永之介と鶴田知也を基軸とした作家のネットワークがあったことを突きとめ、両氏が中心となって県民の生活改善、文化向上をめざして発行された雑誌であることを指摘した。『四国春秋』の場合も、ご当地出身の菊池寛が仲介役となって文壇の大御所作家や気鋭の論客を紹介していたことを指摘した。『月刊さきがけ』や『四国春秋』はルポルタージュ、ドキュメンタリー、座談会などを駆使して読者を飽きさせないための工夫を凝らしており、1950年代に訪れる空前の週刊誌ブームに接続する問題を数多く内包している。

第2章では戦後占領期の世相を反映するものとして、女性雑誌『国際女性』、インテリ層を対象とした総合雑誌『新生活』、原節子の貴重なエッセイを収録する随筆雑誌『想苑』を

論じた。『国際女性』の場合は、戦時中に日本とドイツの航空軍事業界で通訳として活躍した徳丸（末永）時恵が戦後に婦人運動家へと転身し、京都で国際女性社を興したこと、彼女が自分の故郷に疎開していた谷崎潤一郎に働きかけて『国際女性』の顧問になってもらい、その見返りとして京都移住を実現させたこと、谷崎潤一郎の人脈で多くの人気作家が作品を寄せるようになったことなどを論じた。

『新生活』に関しても、雑誌の特性や主要記事の紹介、文芸欄の考察などを行った。同誌の特徴は、当初 GHQ から保護を受けていた痕跡があるにもかかわらず途中から検閲が厳しさを増し、遂には廃刊（表面上はタイトルと編集委員の刷新）に追い込まれていることである。逆にいえば、同誌の内容を追うことで GHQ がどのような文章に神経を尖らせ、何を抑圧しようとしたのかが詳らかになるのである。

『想苑』に関しては雑誌の内容そのものよりも同時代の原節子に焦点化して論じているため、やや他の節と傾向が異なるが、義兄・熊谷久虎の影響、彼が深く加担していたスメラ学塾や九州独立運動などとの関わりを説き、原節子のエッセイ「手帖抄」を精読した。

第 3 章では、欧米文化の浸透に役立つとして GHQ も推奨した探偵小説雑誌のなかから『妖奇』と『黒猫』を取りあげ、それぞれの出版形態、誌面構成、内容を論じている。一方の『妖奇』は既発表作品の再録雑誌から出発し、二流雑誌の扱いを受けつつも、カストリ雑誌ブームに乗って広く読者の支持を集めるようになった娯楽雑誌であり、もう一方の『黒猫』は当時最も洗練された雑誌出版社のひとつであったイヴニング・スター社が手掛けた品格のある探偵小説雑誌であるが、海外作品の翻訳をうまく進めることができなかつたため短命に終わっている。それぞれを比較して読むことで、江戸川乱歩を中心とする日本の探偵小説作家たちの試行錯誤が見える。

第 4 章では占領期文化の象徴ともいえるカストリ雑誌とその周辺に焦点をあて、占領期のカストリ雑誌に関する総論、広義のカストリ雑誌＝大衆通俗雑誌のなかの原爆表象、そして、1950 年代に発行された『小説春秋』と松本清張のミステリーについて論じた。

第 5 章では、戦後日本の地方出版文化を牽引した福岡に着目し、同地域の製紙、印刷、出版事業のありようを検証するとともに、『紙と印刷』、『九州演劇』という雑誌を分析した。なお、第 5 章は戦後福岡の都市文化と深く関わる問題を提示している内容であるため、補助資料として戦後福岡復興年表を付している。

第 6 章は本論の結論である。本研究は新資料の発掘と詳細な情報開示を目的としているため、その記述スタイルは解題的なものにならざるを得ない。つまり、一般的な文学研究のように筆者が自分の問題編成や分析に基づいてテキストを論じるのではなく、その雑誌の内容およびそれに関連する諸言説を遍く収集・紹介していく形式になってしまうのである。本論を読むと冗長な引用の記述が続き退屈さを覚えてしまうかもしれないが、その理由はひとえに“事実を並べる、”という手法で記述されていることに拠る。多くの節では末尾に総目次を添付しているが、それも上記のような事情に伴う必然的な内容であると考えている。

本論を構成するうえで特に留意したのは、海外進出による領土拡大、侵略戦争の遂行というかたちで軍事国家としての色合いを強めていった日本が、敗戦後にそれをどのように総括し、どのようにして言論の主体性を獲得していったのかを見極めようとするところだった。“GHQ 主導による言論の自由の獲得、”という短絡的な歴史認識ではなく、個々の雑

誌、個々の書き手がそれぞれにどのようなことを考え、どのようなかたちで戦後の言論状況を作りあげていったのかを再考することだった。問題意識の根底にあるのは、当時、〈地方〉から〈中央〉に向けて発信された言論・表現のありようを考察するとともに、それがどのようなかたちで 1950 年代以降の娯楽雑誌、大衆雑誌ブームと接続しているかを明らかにしようとするものである。また、戦後占領期から 1950 年代に至る雑誌出版文化の流れを、特に地方文化運動という観点から通史的に追うことで、戦時中／戦後、占領期／朝鮮戦争以降の言論状況における断絶と連続性を両義的に捉えることに主眼を置いている。

(備考)

- 1 用紙の大きさは、日本工業規格 (JIS) A 4 縦型とする。
- 2 和文で作成する場合は 2,000 字～3,000 字、英文で作成する場合は 700 語～2,000 語程度とする。ただし、生命科学研究科に出願 (申請) する場合は、英文 700 語程度で作成すること。
- 3 1 行あたり 40 文字 (英文の場合は 80 文字)、1 ページ当たり 40 行で作成する。
- 4 上マージン、下マージン、右マージンは 2 cm、左マージンは 2.5 cm とする。
- 5 タイトルと本文の間は、1 行空ける。
- 6 片面印刷とし、ホチキス止めをしないこと。
- 7 別紙の添付は不可。
- 8 ページ番号は入れないこと、また改行を行わないこと。
- 9 図表を挿入する際は、白黒印刷でも判別できるように配慮すること。
- 10 論文審査に合格し、博士号が授与された場合は、本要旨を総合研究大学院大学リポジトリにおいて、インターネット公開する。

博士論文審査結果

Name in Full 氏名 石川 巧

論文題目 戦中・戦後の稀覯雑誌と出版文化に関する研究

本論文は、アジア太平洋戦争末期から戦後占領期、1950年代前半にかけて発行された総合文芸雑誌のうち、国立国会図書館その他日本国内の図書館等の機関にもまとまって収蔵されていない稀覯雑誌に関する研究をまとめたものである。申請者は、これらの雑誌が図書館に完備されていない状況について、その理由を、戦時中の図書館の予算、国策による雑誌の統廃合、図書館側の収書意識の限界、読者の経済状態などから説明しているが、本論文では、このような不幸な事情によって半ば忘却されてきた稀覯雑誌の発掘収集をもとに、その書誌情報を明らかにして、可能な限りそれぞれの雑誌の総目次が作成されている。

本論文の最大の特徴はこれまで埋没してきた戦時期から占領期にかけての多数の雑誌の概要を世に知らしめる基礎研究であることである。雑誌によって未発掘の巻号がところどころ見られるのはやむを得ないが、目次や書誌データの提示に合わせて、論文本文において多くの収載作品について詳説されており、今後の近代文学研究（作家研究や個別の作品研究）にも大いに資するところがあるだろう。

また、本論文では中央の雑誌のみならず秋田や四国、京都、そして福岡などの地方雑誌あるいは外地で刊行された雑誌までもが探索され、紙資源の流通、製紙工場の動向など産業的な背景、CCDによる検閲を中心としてのGHQとの関係など政治的な背景に考察が及んでいるところにも大きな特色がある。ここからは、GHQが言論の自由とその抑圧を主導したというだけの単純な歴史的マッピングとは異なる、言論と表現をめぐる雑誌や書き手それぞれの個別的な格闘と妥協の歴史が浮き彫りにされており、それは戦後の言論形成史の深層に迫る意義を含んでいる。申請者も強調するように、近年、「20世紀メディア研究所 占領期メディアデータベース化プロジェクト委員会」（代表・山本武利）の貢献もあり、占領期のメディア研究はプランゲ文庫の資料調査によって格段に進展したが、本論文はプランゲ文庫の資料とは別途に申請者独自の調査によって収集された雑誌に焦点が当てられている点でも、プランゲ文庫のアーカイブを補完する意味合いも持った研究と見なすことができる。

第1章は新聞社によって刊行された中央および地方の総合雑誌『月刊読売』『月刊毎日』『月刊さきがけ』『四国春秋』の四誌を取り上げている。いずれも有名作家が寄稿した点でも重要な雑誌だが、『月刊毎日』を除き申請者の手によって復刻版が刊行されるまでは、ほとんど閑却されてきた雑誌である。読売新聞社、毎日新聞社という大新聞社が刊行した『月刊読売』『月刊毎日』は、前者については戦中戦後にまたがって刊行されている点、後者については、戦時下、編集校正作業が東京で行われ、出版自体は中国の北京で行われていた点が、きわめて特異な点であり、そうした雑誌の全体像を初めて知らしめたことの意義は大きい。特に敗戦の月、1945年8月号の『月刊毎日』に掲載されている石川達三の

小説「沈黙の島」は当時の内地では発表することの考えられない痛烈な寓意小説であり、この作品の発見はアジア太平洋戦争下における戦争文学の見直しにも直結するものといえよう。『月刊さきがけ』『四国春秋』は秋田と四国の地方新聞社による刊行だが、こうした地方の雑誌がなぜ活発に展開されたかについても的確な分析が加えられている。

第2章では京都で刊行された女性雑誌『国際女性』、知識人層をターゲットにした『新生活』、随筆雑誌『想苑』が取り上げられている。これらは占領期に刊行されており、『国際女性』の特徴は、当時、京都に移住したばかりの谷崎潤一郎、および京都における文化人ネットワークの中核にいた新村出を編集顧問とし、彼らの人脈を通じて関西文化圏にゆかりのある作家、文化人の言論を幅広く集めていることである。各号には、谷崎潤一郎はもとより吉井勇、織田作之助、藤澤桓夫、武者小路実篤、阿部知二、笹川臨風、川田順、眞杉静枝、田村泰次郎といった書き手を擁している。こうした作家たちの、これまで知られることのなかった作品や作品成立の背景をうかがわせる新たな情報が見出されたことは貴重である。『想苑』は久留米市で刊行されていた季刊雑誌だが、申請者はこれに掲載された女優・原節子のエッセイを発見し、同時代的背景に留意した分析を行なっている。同誌が原の義兄が関わった九州独立運動にも関係していることが明らかにされており、占領期の九州の言論状況を知る上でも興味深い。

第3章では『妖奇』『黒猫』の探偵小説雑誌二誌が取り上げられ、それぞれの発行元であるオール・ロマンス社とイヴニング・スター社、編集者らの販売戦略が分析されている。前者については、既発表作品を再録編集するという特殊な形態をとったことの意味について、後者については創刊時から同誌に深く関与した江戸川乱歩が海外作品の翻訳紹介を目指したものの、日本がいまだGHQとの関係からその目的を果たせなかったことの意味について考察が行われている。

第4章では占領期に大量に印刷刊行されたカストリ雑誌を出版史的に広義と狭義の両面から再定義し、1950年代以降の週刊誌ブームと接続できると位置づけている。その上でプラング文庫資料の調査等をもとに近い将来において、二千数百冊程度を見込んだカストリ雑誌のデータベース『カストリ雑誌総覧』を構築するための手順までが展望されている。雑誌研究や出版研究は共同研究によってより効率的で生産的な調査が可能になるが、本論文はそうした共同研究への道筋をつける方法的モデルを提示している点において重要である。本章ではGHQの検閲体制下にあって禁じられてきたとされてきた原爆の表象をカストリ雑誌の作品の中から取り出して分析するという興味深い考察も行なわれている。

第5章は、他の章でも焦点をあてられていた占領期の地方における出版活動について、北海道とともに主要な製紙工場を抱え、空襲罹災率が比較的早く早めの復興を遂げたために、とりわけ活発な出版が行われた福岡を取り上げて、同地における製紙、印刷、出版等の出版に関わる産業的背景について調査を行っている。そこには『福岡市史』編纂室の近現代部会メンバーとしての申請者の経験も反映している。地方都市福岡の視点から戦後日本の出版文化を捉え返すという試みは貴重である。福岡における印刷業界および文化活動の動向を伝える雑誌『紙と印刷』『九州演劇』の研究はそうした地方性に主軸を置いた具体的な成果として評価できるだろう。

本論文は原稿用紙にして1600枚という大作であり、新聞社系の総合文芸雑誌、探偵小説雑誌、カストリ雑誌など、膨大な数の雑誌が埋もれてきた出版文化史上の「空白期」から

多数多様な雑誌を発見し、なぜこれらの雑誌が歴史の裏面に埋没してしまったのかという重要な問題に迫っている。この研究によってこれまで読むことのできなかつた全集単行本未収録作品や新資料が多数発掘されている点も特筆されるべきであろう。加えて、本論文に付随することとして、申請者が発掘した雑誌を可能な限り復刻し、成果を広く共有する姿勢を示していることも評価に値する。

東北、四国、福岡などの地方雑誌の調査によって地方文化運動の歴史的意義に光が当てられている点も本論文の功績である。好事家的に扱われ、かつその全貌がいまだ解明されていないカストリ雑誌の出版事情にも本格的な調査が行われている点も重要な成果であろう。

もちろん、本論文にもいくつかの課題があることは指摘しなければならない。例えば申請者の姿勢が事実によって全てを語らせることに意識的であるゆえに、解題的・網羅的な記述に傾きがちであり、そのことが性格の異なる多種多様な雑誌の総括的論理を見出すことを難しくさせていることは否めない。また稀覯雑誌の選択や比較において、例えば探偵小説雑誌における『宝石』やカストリ雑誌における『りべらる』のような結節点（ハブ）的な役割を果たした雑誌との相関性を考慮する視点が不十分であることは惜まれる。このほか、メディア・作家の戦争協力の問題を含めて戦時期と占領期の連続性／不連続性に対する考察が薄い点、戦時および占領期における統制に対して抵抗か服従かという二者択一的な構図に収まっている点、同時代に政治的な指向性を強く打ち出したサークル誌との関係づけがはかられていない点などが問題点として指摘された。

しかしながら、本論文の意義は、例えばかつて文学史家の谷沢永一などが構想した解題書誌学や地方文学の調査研究を継続した花田俊典らの研究を申請者独自の方法によって継承したところにあると認められるもので、これらの問題点は本論文の方法論では解決することは困難であったろう。むしろそれらの課題は今後進められるであろう個別事例の研究によって十分に克服されるべきものであり、本論文の価値を貶めるものではない。戦後の出版文化史において今後必ず参観すべき基礎研究としての本論文の意義をあらためて強調しておきたい。

以上、総合的に検討した結果、本論文を学位授与にふさわしいものと、審査委員全員一致で判定した。

(備考)

1. 用紙の大きさは、日本工業規格 (JIS) A 4 縦型とする。
2. 1 行あたり 40 文字 (英文の場合は 80 文字), 1 ページ当たり 40 行で作成する。
3. 上マージン, 下マージン, 右マージンは 2 cm, 左マージンは 2.5 cm とする。
4. タイトルと本文の間は, 1 行空ける。
5. ページ番号は入れない。
6. 出願者 (申請者) が論文審査に合格し, 博士号が授与された場合は, 本紙を総合研究大学院大学リポジトリにおいて, インターネット公開する。

Note:

1. The sheets must be Japanese Industrial Standard (JIS) A4 vertical.
2. Each line shall have approximately 40 characters in Japanese or 80 characters in English, and each page shall have 40 lines.
3. The top, bottom, and right margins must be 2 cm and the left one must be 2.5 cm.
4. Single spacing is required between the title and the text.
5. There must be no page numbers.
6. If the applicant is conferred a doctoral degree, this paper will be published on the SOKENDAI Repository.